

2004. 7. 15 (木)

(第3種郵便物認可)

15

今として 未来

環境アドバイザーからの提言

▶▶ 2

最近の新聞紙面でも環境問題が特集されることが多い。それだけ人々の関心の高い問題でもあり、一般化されてきたのだろう。中でも深刻な問題は、「地球温暖化」のニュースである。

このまま温暖化が加速するとするならば、「三十年後に、ほ乳類の四分の一、鳥類の12%が絶滅の危険性(国連地球環境白書)」、「二〇五〇年までに、最悪で地球上の37%・百万種以上が絶滅」(科学誌ネイチャー)、「地球温暖化に伴う影響が原因で、毎年約十六万人が死亡、その数は二〇二〇年までにほぼ倍増するだろう」(WH

目立つ異常気象、生態系変化

進む温暖化と環境教育



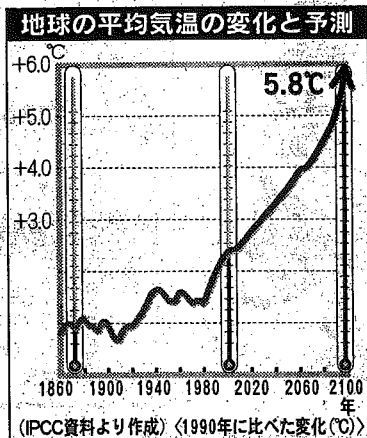
【しろた・ひろみ】

前橋市大友町。県環境

アドバイザー副代表、
同前橋市連絡会会長。
県温暖化防止推進員。
利根西環境フォーラム
会長。元総社エコクラ
ブチーフサポーター。

○ 世界気候変動会議として。また、ロンドン大学のヘインズ教授は「気候変動による病気の負担は、主として発展途上国の子どもたちにかかる」と述べている。

このような現実が報道されているにもかかわらず、温暖化防止の成果は遅々として進まない。日本の場合も、一九九七年の京都議定書で設定された温室効果ガスの削減量6% (一九九〇年を基準に二〇〇八年―二〇一二年の間)の達成目標はおろか、逆に〇一年度中に5.2%の増加となり、目標達成はおぼつかない。世界的な気温上昇は、今世紀中に一・四度は、化石燃料消費によるCO₂増加だけでなく、メタンやフロン、一酸化二窒素といった温室効果ガスで、その大半は人間の活動が原因である。私たちが近年の物質生活の中で大量生産・大量消費にならされている間に、事態は深刻の一途をたど



から四・八度に及び、海面が九〜八十八センチ高くなるという予測もある。特に日本は、この百年間、地球平均気温を上回る上昇ぶりであり、異常気象や生態系の変化が目立つという。地球温暖化の要因は、化石燃料消費によるCO₂増加だけでなく、メタンやフロン、一酸化二窒素といった温室効果ガスで、その大半は人間の活動が原因である。私たちが近年の物質生活の中で大量生産・大量消費にならされている間に、事態は深刻の一途をたど

ている。早急に私たちのライフスタイルを見直していかないと、とんでもないことになるのではないかとという危機感をぬぐいきれない。

早急に温暖化防止の国民的コンセンサスを形成していくこと。そのための環境教育、学習、啓発の必要性に迫られている。この二十一世紀を生き抜いていく子どもや孫たちの世代に、とり返しのつかない禍根を残さないためにも、私たち一人ひとりが地球温暖化の実状について学習し、日々の生活の中で一つでもいいから、温暖化防止のための取り組みをしていかなければと強く思う。(城田 博臣)

広